

ラテンアメリカ

随想

新しい風が吹くアルゼンチン

福嶋 教輝

はじめに

小生がアルゼンチンに来て2年半になる。20年前にも勤務したが、今のアルゼンチンには、「新しい希望を抱かせる風」が吹いていると痛感する。

もともとアルゼンチンの首都ブエノスアイレスはラテンアメリカの中でも最もヨーロッパ的で、南米のパリという代名詞もある。確かに区画整理された美しい街並み、見事な街路樹が続く広い大通り、ハイパークを思わせるような柵もない広大な芝生の数々の公園、多数の見事な洋館。初めてこの地を訪れた人は、かつての栄華の残り香に酔い、川沿いのマリーナや斬新なデザインの高層ビル群に目を奪われ、ここが何度も経済危機やデフォルトを経験した国の首都とは思えない驚きに包まれる。

新しい風

ここに、2015年末全く新しい風

が吹き始める以前は他の多くの中南米同様、言わば支配者階級や名家達が支配した国であった。今のマクリ大統領政権は、もちろんかつてのエリート達もいるが、まるで明治維新の若い「侍」達が、国を変えるのは「今しかない」という気概で、投資ファンドや銀行で何倍もの給料を投げ捨てマクリ・チームに入ってきた。小生も、彼らに問いかけると、「今ならアルゼンチンを変えられる、このチャンスに逃すと変革チャンスは二度と来ない。将来の自分達の子孫に申し訳ない」と言う気迫である。

国民の期待

このさわやかな風をアルゼンチン国民も相当に感じている。政権発足後2年経っても、経済のV字回復はまだまだ見えない。実際にスーパーやレストランに行くたびに価格が高騰している。地下鉄やバスなどの公共交通機関の料金も

昨年2倍に、近く3倍に値上がる。国民の関心を調査すると、一番は「インフレ」と「失業」である。

しかし、マクリ政権の支持率はなんと11月の調査で62%である(ボリアルキア社調査)。近隣諸国を見てもかかる支持率の大統領はいないし、ある調査では民主主義国家では世界トップ5に入る。15年末まで続いたキルチネル大統領の夫妻による保護主義、反欧米の政権は確かに発足当初は中国などからの大豆をはじめとする農産品などの輸出や投資により9%台の成長を続けた。しかし、一次産品価格低迷などにより大幅な成長率の低下、次々に明るみになる前政権の汚職などに、アルゼンチン国民は、もう前政権には戻りたくないと感じ、マクリ政権は、そこに「変革」という風を吹かせた。

インターネット時代の大統領チーム

マクリ大統領の大統領選挙キャ



ブエノスアイレスの並木道 (写真はいずれも筆者撮影)



ブエノスアイレスの洋館とジャカララン

ンペーンを全面的にサポートした人物にエクアドル人のドゥラン・バルバという人物がいる。同人は、ほぼいつもマクリ大統領と一緒にいる。マクリ氏が市長時代から選挙をサポートし、実は裕福なビジネスマンであるマクリ氏を「家族思いで魅力的な普通の人」というイメージに作り変えた。小生はこのバルバ氏と懇意にし何度も食事をしたが、彼からいつも本当に面白い話を聞かされる。食事をしていいる最中にも大統領から電話がかかる。これこそが、SNS時代の新しい大統領を作り出した仕掛け人だと感じ、この「新しい風」を生み出す源泉だろうと痛感した。

バルバ氏は、ラテンアメリカの従来の大統領や政党像はもうこのインターネットの時代では生きてはいけないと断言する。従来の失敗はしない「父親」のような、しかも大牧場主、政治家の名家出身の堂々とした大統領や、いつも同じ顔ぶれの政治家たちの政党には、国民はもう親しみを失ったと言う。バルバ氏は、マクリ大統領にわざと家族と普通のハンバーガーショップに行き警備もない中、他の市民と同様に列に並びお金を払いハンバーガーを夫人

と5歳の娘と食べる、そうすると周りの人がインスタグラムやfacebookに投稿する、大きな講演会で何千という支持者にスピーチをするよりずっと効果があると言う。出来もしない公約や長い演説は誰も聴きたくない、本当に信頼しうる人物なのか、イメージが大切なのだという。さらに、アルゼンチンでは、家族に次いで大切なのはペットだといい、マクリ大統領に血統書のない普通の、どちらかと言えば見窄らしい犬を飼わせ、官邸の外を散歩させた。これも何万というフォローがあった。大統領官邸の大統領の玉座に座らせた画像は数百万人がアップした。バルバ氏は続けた。大統領は失敗してもいい。かつてのような間違いをしない指導者など存在しないことを国民は知っている。大統領は、上から話してはいけない。集会でも、ステージではなく、市民のいる場所において同じ目線ではなさせる。ネットを使って、普通の大統領であり、みんなと一緒に悩み前に進めていく大統領を示せばいい。新しいクリーンな、とても身近な政権である、というイメージを国民に判ってもらうことが、アルゼンチンだけでなく、今

のラテンアメリカで不可欠だ、と言い放った。そして、政党も、これまでの重鎮だけでなく、発進力がある若者や女性などを入れ、大統領だけが主役ではなく、大統領以外にもいつも彼らも同席し発信することで、既存の政党ではない、新しい政党だという「変化」を訴えることを目指した。

バルバ氏は、エクアドルはもちろん、ブラジルやメキシコでも選挙参謀をやってきた。そして、アルゼンチンでの手腕を買われ、再び他の国々でもアドバイスをを行っている。アルゼンチンに吹き始めたネット時代での民主主義選挙において、「新しい風」が、ブラジル、メキシコなど重要な国の選挙の年となる来年に、どういう形で吹き始めるのだろうか。

二期目以降も視野に入ったマクリ政権

新しい風を吹かせているマクリ政権だが、諸課題はあるものの、単にイメージだけで成功するほど世の中は簡単ではない。それを表す重要な試金石となったのは、まさに本年10月に行われた上下両院の中間選挙である。

この選挙で、マクリ大統領率い



ブエノスアイレス市内のジャカランダ



ブエルトマデロの新市街

る与党連合カンビエモスは予想以上の勝利を取め、上下両院で第一党に躍り出た。まだ、下院で4割、上院で3割の議席であり、過半数を超えることは出来ていないが、ペロン党、急進党という巨大政党ではない、PRO（共和国提案）というまったく初めて出来てきた政党が、2019年の大統領選挙も含め二期8年、それ以降も視野に入れ始めた。他方で、対峙する野党ペロン党は、分裂し、このまま2019年までに対抗軸を立てるのは難しい状態となった。

マクリ政権の評価

ここで長々と日本の7.5倍もあるアルゼンチンの羨むような農漁業、エネルギー、鉱業などのポテンシャル、さらに15年も中国以外が入ってこなかったインフラなどでの大きなチャンスなどについて語ることはしない。

西側要人の公式訪問がまったく途絶えていたここ約20年と比べ、この2年間だけで安倍総理が日本の首相としては57年振りに訪問されたり、米、仏大統領、独首相など30人以上の首脳が次々と訪問し、日本企業のトップが連日アルゼンチンに来られていることだけ記すことにしたい。

小生が評価したいのは、先にも書いたが、今のマクリ・チームの志の高さである。

そのさらなる証拠は、OECD加盟申請である。アジアでは日本と韓国しか加盟していない。シンガポールなど多くのアジアの国は十分に資格がある。しかるに、OECDの規則に縛られるのを良しとせず加盟しようとはしない。しかし、マクリ大統領は自身から、ペンス米副大統領の訪問時

に、「OECDというスーツを着たい、そうすれば太ることもやせることも出来ない」、つまり、仮に自分の政権がなくなっても、今の改革路線は継続される、「もう二度と左や右に振れる振り子の国にはならない」という決意を語ったそうである。これこそが、彼らの真意である。

もちろん、経済指標や民間投資格付けは改善はしているも、今なお投資リスクは高く西側諸国の海外投資はまだまだ十分に入っていない。インフレ、公共料金値上げなどに対する今後の国民の不満はいつまで持つか。また様子をじっと見ていた中国も、大きな体を動かしたし、巨額の投資案件を発表し始めた。アルゼンチンも AIIB に加盟したり、一帯一路フォーラムに大統領が参加した。この様な様々な動向は注視していく必要がある。

一番改善した関係は日本

ミケティ副大統領が、日本から来られた大臣との面談で、「マクリ大統領が政権発足以来、一番改善した2国間関係は日本である」と言われており、閣僚たちに「日本との改善をモデルとするよう」に指示したと言われた。

それを伺ったとき、正直小生は喜ぶというか、なぜ大統領がその様に考えられたか考えた。小生は、今を黄金の四年間と呼んでいる。つまり、昨年、の総理訪問、本年の大統領訪問、来年、再来年の亜日でのG20と、4年続けての首脳訪問が確定している。これは200年のアルゼンチンの史上初の出来事である。

対日関係強化の大統領の明確な方針の下で、動くはずもなかった

多くの案件が動き出した。投資協定、電子商取引協定、サービス協定、租税協定などが実質合意したり交渉が始まろうとしている。日本から一方的にお願いできるビジネス環境整備委員会も立ち上がり、ラテンアメリカではブラジルとだけ存在した農業対話も開始される。パタゴニア産の牛羊肉や、和牛の輸出入の解禁プロセスが一気に加速化した。ラテンアメリカではじめてワーキングホリデーが実現し、すぐに定員の枠を超えてしまうほど多くの若者が日本へ行こうとしている。アルゼンチンからの観光旅行者も2014年と比べ一気に3倍になった。小生の大使館のfacebookのフォロアーも8,000人から20倍にふくれあがった。他にも枚挙のいとまがないほど、日本とアルゼンチンは近い国になっている。

終わりに

新しい風が吹き始めたアルゼンチン。まだまだ日本からは遠い。しかし、こんなに大きな流れが見えている。このアルゼンチンの風が本物になることは、アルゼンチンや日本だけではなく、中南米、世界にとって本当に意味のあること、と小生は確信しつつ、これから皆様のお知恵を拝借しつつ、あらゆる分野で、この黄金の4年間を活かして、この新しい風にのせて両国関係が大空に駆け上がることを祈念する。

（ふくしまのりてる 在アルゼンチン
日本国大使）